

援助職の未来

2: ソーシャルワーカーのジレンマ

千葉 晃央

あの人は

何をしているのだろう？

平日の昼間に街を歩くことは、何十年も基本的にはなかった。よって、銀行や郵便局に行く経験も限られていたため、そのあたりの経験が極端に少なかった。これまでも、利用者さんが仕上げた製品を運搬するためにドライバーとして眺めたり、事業所で社会体験、行事で利用者の皆さんと出かけたりするときには平日の街を少しは感じた。「平日の街」は私にとっては日常にはないものだった。仕事の傍らに見えたり、のぞいたりした感覚のものだった。それが4月以降は、平日も土日も祝日も基本的にはなくなった。四半世紀馴染んだ曜日のリズムからは一定離れた。平日に街を歩くと働く人々の姿が目によく入るようになった。平日を歩く自分への違和感は消えないし、若いころにできたリズムは一生消えないということもきく。

どこどこの、誰誰から

青年期、学生の立場を終えると多くの人がどこかに勤める。そこには、既存の組織があり、その組織の目的があり、組織にはルールがある。そこに適応していくことが、個人としてはその時期の主題となる。それは、その組織の何かを担っている誰誰さんになるところから始まる。そして、仕事で経験と成果を重ねると、誰誰さんあてに様々なことがもたらされる。その人がそこで担うことは組織の目的、組織のルールによって限定される。つまり、それ以上のことに、どう向き合うのか？は、その援助職次第でもあるし、その組織や職場次第でもある。「必ず～できます」は、そこにはない。その権限は一人の援助職にはないことが多い。それが組織で働くことである。一方で組織というところで社会的に守られている部分も同時の存在する。

私とこれまで一緒に働いた方々の中には、退職し、個人で起業する人もいた。事業所

の長として組織を作る人もいた。また、他組織からヘッドハントされた人もいた。ある程度仕事を経験するとそうした分岐点もある。私の場合は47歳での分岐点なので、周囲の例に比べると少し遅いかも。また、同じ分岐点の意味ではない、ということも言えるかもしれない。

また、これまでは時代的な背景もあった。現在は、多くのベーシックな支援的な社会資源がそろう、むしろ既存の組織が現代的状況にどう適応するかが多くのところで問われている。制度的に労働力不足必然なのに過剰供給で種類や数だけ増えた社会資源、事業所、一方でマンパワー不足という局面で、何をするかである。私がこれから何をするか？を自分に問うと、既存の制度にのっとった種別の何かだけではないだろう。それは社会に何かをプラスすることにはならない。社会の今までの流れをそのまま進

めることになる。私の好みである、今までの事態に何かを加える円環的な流れには当てはまらない。今あるものがよりうまく回ればということを試みたい。もちろんそれだけでなくでもいい。今ある流れにも取り組み、大切にしながら、新しい流れを実践する。これはソーシャルワーク的視点そのものである。私はプラスになるものを、自分が培う時間をきちんと持つことが、自分の今後のために今必要だと判断したのである。その課題を自分に突きつけたのである。

ソーシャルワーカーの矛盾

映画「60歳のラブレター」では、主人公演じる中村正俊が巨大企業を定年後、いいポジションで小規模組織に迎えられ、勤



めるところから始まる。そして、中村が現役時代取引していた会社と対峙する場面が巡ってくる。「御社と私はこれまでのたくさんの重要な案件を共に取り組んできた」という主人公中村に対し、以前の取引先の担当者は「勘違いされては困る。あなたと仕事をしたのではない。あなたのいた〇〇会社さんとの取り引きです！」と返す。これは人生後期によくある「葛藤」を表現している。

援助職といわれる仕事をしている人の多くは、ほとんどが組織に属している。その多くの組織は何らかの法律に基づき、行政からお金を得ている。つまり制度に左右されるのである。それが現在の援助職という職業の多くの状況である。安定でもあるが、一方でそのルール以上のことは起こらない。また、起こさなければ現状維持として、そこに居続けることができるというメリットもある。しかし、社会は「現状維持」とはいかない。刻々と対象者の状況も時代背景も変化し続けている。それなのに…である。

援助職、特にソーシャルワーカーはソーシャルアクションや、ソーシャルワークの開発的機能が任務といわれている。古くは「社会改良家」(まさにソーシャルをワークする)といわれたのであるが、その気風は様々な経過で薄くなった。その背景の一つには、政治的体制の維持を願い、社会体制の変化を嫌う権力者側の恐怖もあった。住民の連帯、社員の連帯などは恐れの一つである。グループを組み機能させることを得意とするグループワーク、グループワーカーが今後養成されないことは既得権者には好都合である。ソーシャルワークの一つの手段である集団援助技術、グループワーク

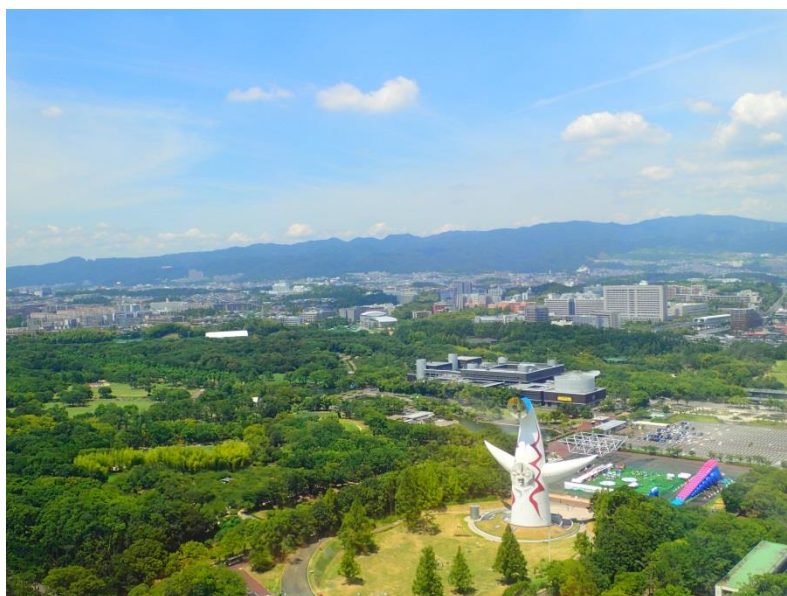
論といわれ長く培われてきたその科目は、福祉単独科目から撤廃もされた。

ある時期以降、集団や連帯こそが既得権者には恐怖なのである。現在のコロナ禍では、さらに既得権者には恩恵がある。関所のある幕藩体制に戻ったような住民の分断を起こし、同調圧力による相互監視、自発的な行動自粛もとてもよく機能している。これほど既得権者にとって都合のいいことはない。三蜜回避では、デモや国会前に集結も簡単にはしにくい。手をつないで基地を取り囲む、人間の鎖もしにくい(人形を間に入れて実施していたが!)。シュプレヒコールも上げにくい。理由は「ウィルスのせい」。誰も悪くない。行動の監視を進めるのもウィルス追跡のためで、誰も悪くない。集団を学んだ立場、システムを学んだ立場からそういう側面がどうしても見える。

そこで、これまで見てきた社会の場所から少し離れてみる。離れて別のところからみたら、新たに見えることもあるだろう。これまで見てきた世の中を違うところから見る。これからより複眼的に見ることもできるだろう。そんな思いも私の変化にはあった。

若い?!

最近直面したのは寝る時間に関するものがひとつあった。これまでは翌日の出勤時間に合わせていた。しかし、一定のものがないと、前日の寝るきっかけにならない。私は割と起きていてしまう方で、翌日起るのが遅いと頭がすっきりしない。そこに



関しては、今も工夫を様々試みている。

シェアオフィスへの出勤は、自転車か市バスである。電動自転車が威力を発揮している。車にはめっきり乗らなくなった。毎日の運転での緊張と気苦労があったことが自覚できた。実際に24年間の通勤及び業務上で何回か事故を経験した。幸い軽微で、多くは事故をもらった。ガソリンスタンドにはめっきりいかなくなった。京都ぐらいの広さと京都の公共交通網整備状況だとある程度公共交通機関利用のみで暮らすことができる。これまでは、そんなことを感じることなく過ごしてきた。

以前より自分が時間のコントロールができるようになったので、これまで時間がさけなかった様々なことにも取り組んだ。様々なコストの見直しも行った。携帯のプラン変更、固定電話の見直し、そして断捨離である。特に不用品の処理である。捨てることも結構手間もエネルギーもお金も必要になる。これまで10年単位で週6.5日以上働いていたら、そこに時間をかけることができなかつた。フリーになり、居住地という選択も含めて考えるようにもなった。

今後、いつでも動くことができるように、とにかく身軽にしておく。それは選択の幅を広げるだろう。可能性広げるかもしれない。

これまでは時間もなく、お金がないわけではないという状況だった。処理しなくてはならない不要なものがあるという結果は、これまで不要なものも手に入れ続けてきたともいえる。ストレスによる買い物依存とまではいかなくても、つい買うことでの何らかの発散である。そこにはネットショッピングが拍車をかける。つまり「もの」で何かを埋めようとした。でも、「もの」では埋まらなかった。「これをあなたのこれからの人生、新しい人生に持っていきたいかどうか？」と断捨離の創始者？のやましたひでこがよく言う。そう思うと何を残し、何を処分するか明確になる。お金に限られている状況を楽しむようにもなった。こうした飢餓的実感から、歩むのはまさにリスタートである。自転車に乗り、現場にも立ち、超質素な生活をする。「千葉さん、この頃、若いから…」そんなことを言われているのは悪くないなあと思う。